

7 さが文化 2009年(平成21年)10月31日(土曜日)

県内文化

美術

野中 耕介

この秋から来年にかけて、私が担当する美術展が三つほど重なっていて、現在その準備に追われ頭の中がパニックである。何しろ凝り出したら止まらない性分、画家や作品の調査を始めるのと、ついでに夢中にな

って時を忘れてしまう。こんな風だから、案内をくださった方々には誠に申し訳ないのだが、このところ県内(と県外)の展覧会を全然見ていない。時間は作ればあるのだから、肝心なのは「心」で、今は人物にしろ出来事にしろ、完全に「過去」に心を奪われてしまっている。これはこ

過去へ通じる「一枚の」道

れで集中力、洞察力を要することであり、「現在」への目の切り替えが器用でできないでいる。評論を担当させていただいている身でありながら、全く情けない限りである。

今、洋画家・武藤辰平の展覧会(「武藤辰平―フランスの風―」県立美術館、11月19日から)を控え、か

とばや作品評等、残された周辺の資料が思いのほか少なく、その実像を追いかけするのに苦勞している。……「そういえば、武藤はフランス留学の時、どこに住んでいたのだろうか?」過去の展覧会や文献等を見ても、そのことには全く触れられていない。この素朴な疑問を解く鍵が、遺族のものに

残る一枚の古い絵はがきに

あった。

1931(昭和6)年、武藤辰平がフランスから弟常平に宛てたはがきには、判読がし難いものという記

してある。「Bd Jordan 14e」として「Fondation Sautouma」。この住所は「パリ国際大学都市(19

25年創設)」の一面であり、そしてここには、戦前のパリで芸術文化に惜しみない援助をおこなった実業家、「バロン薩摩」こと薩摩治郎八が私費を投じ建設した「日本館(日本人留学生のための宿舎。1929年開館)」がある。

薩摩は日本人画家を助け、あの藤田嗣治とも深い関わりがあった。……武藤はそうした当時のパリ画壇の中で、何を、何を思ったのだろうか? 薩摩、そして藤田とも何か関わりがあったのだろうか? ……などと、また新たな疑問がどんどん生まれてくる。

過去へと通じる「一枚の」道―歴史のロマンを感じながら、今夜もまた眠れなくなるのだ。

(県立美術館学芸員)